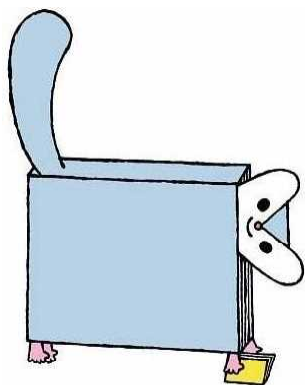


日本の秋を思う

2023. 10. 15
美幌町図書館長 竹花 史康



先月の「館長の一言」で、十六夜、十三夜について書きましたが、どちらも伝統的な日本の秋の行事です。人によって好きな四季はそれぞれだと思いますが、日本人にとっての秋は特別なものに思えます。

日本文学研究者のロバート・キャンベル氏は、日本人にとって秋が持つ意味を、「日本人の心に描かれる秋の情緒」というテーマで語っています。

そのなかで特に気になったのが、「日本文学に描かれている日本の秋の風情」についてでした。その一部を紹介したいと思います。

「例えば古典の『源氏物語』の秋の庭の描写にも、寂しさの中に華やぎや色っぽさがあり、深い思索と宮廷文化への憧れが見られます。近代では、夏目漱石の『こころ』でも、墓参りをする「先生」と「私」の心情が淡々とした秋の描写の中に印象的に刻まれます。現代では村上春樹の『ノルウェイの森』に薄く透き通るような秋の空の記述がありますが、そこに地上の人物たちの想いの残響が聞こえるようです。」

『源氏物語』はまったく読んでいませんが、好きな夏目漱石、村上春樹の作品を例に取りあげていたので、嬉しく思うとともに、「なるほど」と強く感じました。

そして、ロバート・キャンベル氏は、最後に

「日本の秋の魅力とは、長年の歳月が編み出した季節の味と香りを「綺麗だね、いい匂いがするね、美味しいね」と、すべての感覚器官を動かして味わえること。時空が感覚に訴えてくるのです。」
と結んでいました。

仕事に追われ、物価が上がり、いろいろなことが二極化する世の中ですが、そんな時代だからこそ、私たち日本人が持ち続けてきた、「秋を楽しむ心」を大切にしたいと思っています。